

郭務棕はどこにいたか

中村通敏

◆はじめに

古田先生は著書『壬申大乱』で万葉集にある次の二つの天武天皇の和歌は、

【25番歌】み吉野の 耳我の嶺に 時なくそ 雪は降りける 間なくそ 雨は零くふりける その雪の 時なきが如 その雨の 間なきが如 隈もおちず 思いつつぞ来くこし その山道を

【27番歌】淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉見く与良人四来三（よき人のよしとよく見て よしと言ひし 芳野よく見よ よき人よく見）の二首の和歌である。

古田先生は、【この25番歌の「み吉野」は大和の吉野ではなく、九州佐賀の吉野であると考証され、つづく27番歌の意味不明の歌とされて来たものを、この「与」は原文が改訂されている。原文は「芳野吉見 多良人四来三」で「多良人よく見」である】と指摘され、【「元暦校本」その他、各本（類聚古集、紀州本）ともそうだ。その「多」を「与」と直し、一段と珍妙な、「土地勘」を削り去った歌としてしまったのである】と考証された。

引きつづき先生は【白村江の敗戦後、天武は吉野にいる淑人くよきひとに、みぞれの山道を越えて会いに来た。大友皇子との対立についての自分の「決断」を唐軍の代表に示し、「淑人」は同意してくれた、その喜びを意味不明の形の暗号文的な和歌として仲間に伝えたのではないかと】と推量された。

この論証は、郭務棕は「占領軍の代表者、倭国消滅の任務で多数の唐軍を何度も、率いてきた人物」という、古田先生を含め、一般的な見方と相反する形容「淑人」だ。また、なぜ「多良」という場所に、「淑人」は居たのか。先生は、有明海が半島出兵の軍事基地であったから、とする。これらの疑問を解くために行った作業とその結果について報告する。

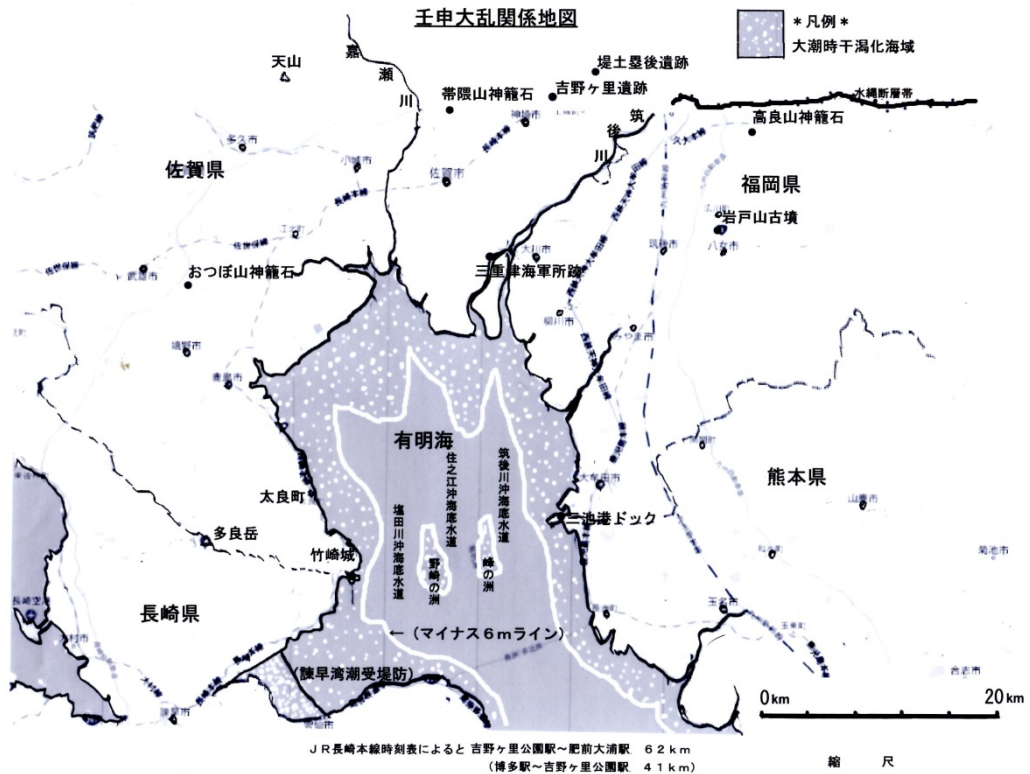
◆何故淑人は「太良」にいたのか

なぜ「多良（太良）」なのか。先生は次のように述べる。【白村江の戦いに沢山の軍船が九州に集まり出港していったはず。博多湾では敵国の眼があり軍事上無理だ。有明海・佐世保湾・大村湾・伊万里湾であろう。郭務棕は九州王朝の軍事拠点を制圧するために有明海に来たのではないかと】と。しかし有明海は国内第一の干満差のある水域として知られている。大型軍船が自由に動き回れる水域ではない。この袋小路的な海域を拠点にしたら、被占領地の反乱分子によって、場合によっては殲滅される危険性があるのに、何故？

これらの謎について、海域の特性については、国土交通省のこの水域の海底地形図によって、太良町の竹崎港の付近が有明海北部で唯一の自然良港ということが理解できた。近くに、竹崎城（行基開設伝説もある）復元施設もあった。また、駐留軍の司令官郭務棕がこの袋小路的なところに駐留できたのか、当時の東アジア情勢と唐軍の百済統治政策を調べてみて、理解することができた。

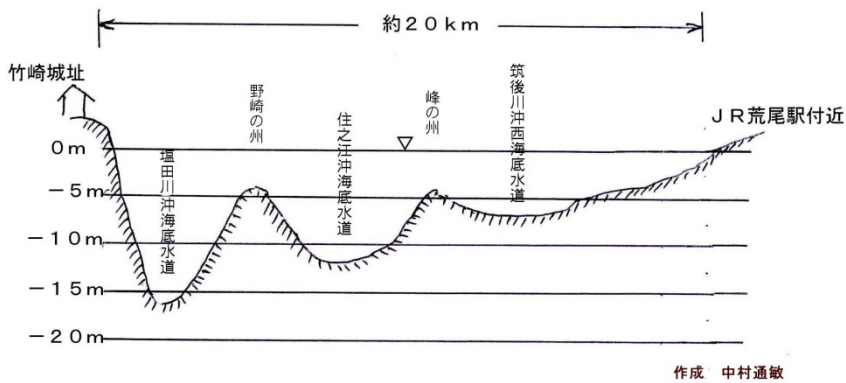
弥生時代以前の小型の船ならばともかく、7世紀の4、50人も乗れるような大型船では、吃水1メートル程度を確保できる接岸施設の確保は難しかった、と思われる。近代になって、明治41年完成の三池炭鉱の石炭積出港として三池港ドックができるまでは、有明海北部沿岸には大型船舶が直接接岸できる港は、太良町の竹崎港以外はなかったのだ。

以上の事柄、干潟になる海域・古代諸施設など関係個所を地図に表わしてみた。



海底地形については、国交省九州地方整備局がネットで公表している有明海北部の海底地形図を参照し、竹崎港と熊本県側の対岸との横断面も作成してみた。

有明海北部横断面図（竹崎～荒尾間）



この有明海横断面図に見られるように、太良町の竹崎港の突端で、有明海の海底は、大きくまるで崖のように落ち込んでいる。その結果竹崎港前面には幅3キロ長さ10キロメートルに及ぶ船舶停泊可能水域が存在していることが分かる。現地には竹崎城址として小ぶりの櫓を持つお城の復元施設があり、太良町の説明版には、南北朝時代に南朝に味方した島原の有馬康孝が築城した、とあった。また、竹崎城の特徴として、自然の地形を利用して、水陸両面に備えた山城と水城の性格を持つ築造形式であり、石垣の規模からみて、佐賀県内では名護屋城、唐津城に比すべきもの、とあった。近くに、竹崎城展望台という広場があり、そこにも表示板があり【ここは竹崎観音寺の「拝み堂」の跡地と伝えられていて、和銅年（709年）に行基菩薩によって開基されたと伝えられる】と、あった。推定

だが、その観音堂址と伝えられるところが郭務悰の滞在地であったと思われる。(竹崎島の地図・竹崎城復元写真参照)

「太良」というところは、反乱軍の可能性を除外し、倭国と唐との協力体制が確認できれば、郭務悰が停泊地と選定しておかしくない場所であった、といえると思われる。

◆郭務悰とは何者なのか。「占領軍司令官」と「淑人」とのイメージとの乖離は。

古田先生は、天武が「淑人」と形容したことについて、『壬申大乱』で概略次のように説明される。【『詩経』に「淑人」の言葉が「淑人君子」という熟語で用いられることから「淑人」は「単に善人の意味ではなく、きよくふかく、国政を正す人」を意味する】と。

先生は『壬申大乱』で郭務悰らの駐留軍の目的は、【第一、唐のみが「天子」であるという大義名分。第二、ふたたび、唐に対して敵対しないような「軍事的制圧」体制の安定化。この二点にあったこと、およそ疑いえないところではあるまいか】とされるが、この見方と「淑人」とはイメージがうまく噛み合わない。

この時期の東アジア及び国内の主な事件を時系列に記載してみる。

- 660年 唐が百済を滅ぼし、百済に熊津都督府など5都督府を置く。
- 663年4月 新羅に鷄林都督府を置く。都督は新羅文武王が任じられる。
- 663年9月 白村江の海戦(662年説もある)。
- 664年5月 郭務悰の第一回目の渡来。表函と献物を進じ、同年12月帰国。
- 665年9月 劉徳高・百済禰軍・郭務悰渡来(254人)。表函を進ず。12月帰国。
- 666年10月 高宗の泰山封禪のイベント(劉仁軌が半島及び倭の酋長を従え参列)
- 668年1月 天智天皇即位。
- 669年 郭務悰ら2000人渡来。
- 670年頃 新羅の唐への反乱が始まる。
- 671年1月 李守真らが渡来し、表を上る。同年7月李守真と百済の使人ら帰国。
- 671年11月 薩夜馬ら対馬に到着し、郭務悰ら六百人と沙宅孫登ら千四百人渡来。
- 672年3月 郭務悰に天皇崩御を告げる。
- 672年5月30日 郭務悰ら帰国。
- 672年夏 壬申の乱
- 676年 新羅が唐を完全に追い出し三国統一。
- 683年 九州年号白鳳 朱雀に改元
- 701年9月 大宝律令発布。日本国誕生とされている。

◆664年5月の第一回の使節団は

第一回の使節団は、郭務悰などが、唐の劉仁願(劉仁軌?)の代理として渡来している。九州王朝の留守居役に対して、今後の交渉団の受け入れ態勢などの話し合いであった筈。注目すべきは、『日本書紀』によれば、唐軍の代表団は常に「表函」を持参していること。

もちろん筑紫君野馬が虜囚として唐に生存していること、薩野馬から留守居役への戦後処理についての指示文書ももたらされたことは間違いない。その事前交渉に従って、翌665年9月 第二回目の、劉徳高・百済禰軍・郭務悰らの渡来(254人)となる。

トップの劉徳高は唐人と思われるが、百済禰軍は近年発見されたという墓碑銘で百済人であることは間違いなく、三番目の郭務悰は不明だが、百済人の禰軍の次に書かれていることからすると、唐人ではなく熊津都督府の百済官人である可能性が高い。この二回目の劉徳高らの使節団が対倭国基本方針を呑ませたものであろう。この254人という人数が間違いなければ、「軍団」とか「武力による威嚇」という表現には合わない。

ところで、『資治通鑑』は編年体で叙述されているので、当時の情勢と高宗との関係などから、劉仁軌などの行動が、その当時の情勢下での判断などの記述と相まって、紀伝体で述べられる『旧唐書』よりも理解が進む。

『資治通鑑』の百済義慈王達が降参した後の戦後処理に、どのような政策を取ったかについて、龍朔3年(663)の記事に概略次の様にある。【戦場を片付け、村長などを選び、

道路、堤防等を復旧し、他国が侵略できないように国境を警備し、民業を復し、百済の民衆皆が喜んだ、「百済大悦】とある。占領地の民を自立させ、それを間接支配する、という政策であった。特に「百済大悦」という記事が目を引き。これは『旧唐書』にはない。

◆中国史書に見える士大夫の「君子」像。

同じ時期の『資治通鑑』の記事で、劉仁願が高宗に帰国報告をするときのやり取りがある。高宗から、「卿は本もと武人なのに、戦後の政策立案実行も、また、その報告書も見事なものだ。どうしてそんなにうまくやれたのか」と聞かれ、「あれは全て仁軌がやってくれたこと。私は彼の資質をうまく使っただけ」と答える。これを聞いていた侍従の上官儀が「兩人、君子なるかな」と評した、とある。このエピソードは『旧唐書』にも同様の記事がある。古田先生も読まれたと思われるが、目に留まらなかったと思われるのは残念だ。

この第二回の交渉の結果がどのようなものであったかは不明だが、その後の半島情勢の変化によって変動はあったものの、唐の方針の大枠は変わらなかった、と思われる。

筑紫君薩野馬などの虜囚となった九州王朝幹部との、九州王朝の将来についての方針の下話が、ついでの上の交渉であったことは想像に難くない。また、『日本書紀』にも多数の唐人の捕虜が半島から送られていたことが記されている。これら捕虜の送還や、新羅の百済支配を嫌う百済や旧加羅諸国の難民の処置についても当然話し合われたと思われる。

郭務悰らが帰国した当時の朝鮮半島情勢は、唐軍の旗色が悪くなりつつあるときであり、しかも近江に引きこもっていた天智も亡くなったときであり、大海人皇子の政権奪取プランは渡りに船であった可能性が高いと思われる。

◆二千人の二度の渡来は？

ついで、669年に郭務悰ら二千人の渡来を『日本書紀』は記している。2年後2回目の二千人の渡来については、郭務悰担当の六百人と、送使沙宅孫登（百済人）の千四百人と『日本書紀』にある。沙宅孫登は、斉明紀6年10月に唐の捕虜百余人を連れてきた記事に見える。義慈王とともに蘇定方將軍につかまって唐に送られた人物だ。郭務悰が軍関係、沙宅孫登が難民関係というような役割分担などがあったことをうかがわせる。

つまり、唐の基本政策は、「唐に逆らわない体制をその地に作り、間接的に支配する」ということにあった。壬申の乱は、唐公認の九州王朝消滅の大方針に合う方向であり、旧百済国官僚や九州王朝留守居軍の協力によってなされたと思われる。つまり『壬申大乱』の古田説「天武と九州王朝（大分君）との共同作業で勝利した」と同じ結論となった。

◆唐軍の倭国破壊説について

ところで、古田先生は、九州年号についての研究の進展によって、九州年号に磐井の乱に関する痕跡が見えないことから、乱そのものが架空で、磐井の墓などの破壊は継体軍によるものではなく、白村江敗戦の後に占領軍として渡来した唐軍によるもの、とされた。しかし、この古田説は『壬申大乱』の「郭務悰＝淑人」のイメージとは相いれないものだ。

文部省の「地震調査研究推進本部地震調査委員会」が平成16年（2004年）に「水縄（みのう）断層帯の評価」という報告書を出している。骨子として、【天武7年（679年）の筑紫地震は水縄断層帯の最新の活動である可能性があり、1万4千年周期で発生している。その地震はマグニチュード7.2程度の地震を発生し、岩層が水平面で2メートル程度ずれると推定される】と結論している。水縄断層近傍の磐井の墓の周囲の石人石馬などの建造物が、継体軍の破壊に耐えても、唐軍の破壊の手が及ばなかったとしても、この地震によって倒壊を免れなかったのは間違いなし、既に世は天武天皇の時代であり、九州王朝ゆかりの人々には、破壊された墓域を修復する力もなかったことであろう。

◆結論

古田先生の唐軍の暴虐説の唯一の物証ともいえる、磐井の墓の唐軍による破壊説の根拠が消えると、郭務悰＝淑人のイメージがピッタリと収まるのではないか。唐軍の大規模九州王朝破壊行動はなかったのではないか。というのが私の仮説呈示です。

尚、『資治通鑑』の記事から、唐軍（劉仁軌）の百済占領地統治政策や君子と言われたことについては、「新しい歴史教科書（古代史）研究会」のホームページの「郭務悰は淑人君子であったのか」を参照ください。<http://torashichi.sakura.ne.jp/> おわり

【参考資料】

- ・国土交通省HP九州地方整備局諫早湾近傍海底地形図
- ・続国訳漢文大成資治通鑑第十一巻 加藤繁ほか訳註 1922年 国民文庫刊行会
- ・白村江の会戦の年代の違いを検討する 青木英利 古田史学会報102号
- ・日中歴史共同研究報告書 北岡伸一／歩平編 2014年 勉誠出版
- ・地震調査研究推進本部地震調査委員会「水縄断層帯の評価」2004年